

被災地派遣レポート〈第85回〉

教育庁都立杉並高等学校 浅川 友二さん

1 派遣先の概要

私は、平成24年4月1日から1年間、仙台市消防局防災企画課に赴任しました。

仙台市消防局は、仙台市の消防・防災を担う職員1,000人程度の組織であり、その多くが消防吏員（消防士）です。その中で私の所属していた防災企画課は、自治体の防災行政の最上位計画である「地域防災計画」の内容を検討、修正する部署でした。

私の故郷である仙台市では、東日本大震災時において沿岸部を中心に1,000名近い犠牲者が出ました。津波避難対策を始め、役所の職員も被災している中での避難所運営、物資供給の困難さなど、課題は多岐に渡りました。それらの課題と反省を踏まえ、次に起きる災害の被害を最小化するとともに、東日本大震災の被害を直接被った都市としての教訓を外に向けて発信するためにも、地域防災計画の修正は仙台市の施策の中で最重要課題の1つとして位置付けられていました。

2 業務内容

1年間の業務は休む間もないほど多忙でした。その中で私は、防災計画本文の構成の検討、執筆編集、市役所内の各局との連絡調整、各種会議や市民説明会の運営等の業務に携わりました。消防局の中で、他都市から長期派遣されている職員は私1人だけだったので、私の存在などは本当に微力だったと思いますが、「被災都市だからこそ作れる防災計画を作ろう」という思いの下、部署内で一致団結して様々な業務に取り組んでいました。

仙台市の新しい地域防災計画は、「自助・共助・公助」の理念を明確に打ち出し、先進的かつ効果的な防災行政を進めるのはもちろんのこと、市民や地域団体が日頃から行うべき備えや、それに対する行政側の支援・協力体制が明確化されました。「防災」は役所の中だけで完結するものではなく、都市全体、市民全体の総合力によって最大の効果が実現されるのであり、そのための計画・施策でなければならないということが、市長はじめ仙台市職員の皆さんの総意でした。

3 最後に

東京都職員である私が、こうした形で故郷の役所で働くことになるとは夢にも思いませんでしたが、悪夢のような東日本大震災の傷跡から徐々に立ち直り、来るべき次の災害に備えて議論を重ねる市職員の皆さん、市民の皆さんの姿から、逆に私が勇気をもらったような気がします。また仙台の皆さんに会える日を楽しみにしながら、今後も被災

地の復興を遠くから応援していきたいです。